

技術情報

J A 全農やまぐち
営農推進部 TAC・営農推進課
(083-988-0681)
平成 23 年 12 月 5 日 発行
第 153 号

イネもみ枯細菌病菌による苗腐敗症の防除対策

本年イネもみ枯細菌病の発生が多かったことから、11月29日付けで病害虫防除所から来年育苗期の苗腐敗症対策が発表されました（病害虫発生予察技術資料第6号）。

つきましては、り病種子による苗腐敗症の発生がないよう、下記及び病害虫発生予察技術資料第6号を参考にご指導をお願いします。

記

1 イネもみ枯細菌病の発生状況

- (1) 8月中～下旬に出穂した圃場を中心に発生が多かった。

2 防除対策

- (1) 塩水選をうるちは比重 1.13 以上で、もちは 1.08 以上で実施する。
- (2) 未消毒の種子は銅成分を含む効果が高い薬剤で消毒する。
- (3) 30℃以上で発病しやすいので、出芽時、育苗期間中の温度管理に注意する。

3 防除薬剤

- (2) 防除薬剤（銅成分を含む薬剤）
 - ・ モミガードC・DF
 - ・ テクリードCフロアブル

4 留意事項

- (1) 全農の消毒済み種子はモミガードC・DFで消毒しています。
- (2) 温湯種子消毒は、もみ枯細菌病菌に対する防除効果が十分でないので、生物農薬を組み合わせた種子消毒を実施してください。
- (3) スターナ剤は耐性菌が発生しているため、過去に防除効果が低かった場合は他の剤に変更してください。
- (4) その他の留意事項は発生予察技術資料第6号の防除上注意すべき事項を参考にしてください。

5 イネもみ枯細菌病菌の生態と被害

- (1) もみ枯細菌病菌による被害は育苗期の苗腐敗症と本田での籾枯症（もみ枯細菌病）です。
- (2) 苗腐敗症の被害症状は発生予察技術資料第6号のとおりです。籾枯症（もみ枯細菌病）は籾全体がはじめ灰白色になり、その後淡黄色に変色します。いもち病などとは枝梗の褐変等がないこと、護穎が変色しないことで区別できます。罹病した籾の玄米では、病斑部と健全部との境界が帯状に褐変します。
- (3) 伝染源は、苗腐敗症ではり病した種籾で、籾枯症（もみ枯細菌病）では感染苗の移植と、圃場の前年り病した籾殻及び稲わらです。
- (4) 籾枯症（もみ枯細菌病）は高温、高湿条件で発生し、出穂前7日間の最低気温が22～23℃以上で、出穂前後に適度の降雨と風があることが多発する条件となります。

イネもみ枯細菌病（苗腐敗症）対策

8月下旬における巡回調査の結果、イネもみ枯細菌病の発生が平年に比べ多い状況でした。

については、以下のとおり平成24年度産水稻の育苗期における防除対策の徹底をお願いします

1 本田での発生状況

8月下旬（8月29日～31日）の巡回調査では、イネもみ枯細菌病の発生ほ場率は、5.8%（平年0.8%）、発病穂率0.03%（平年0.004%）で平年に比べ多かった。

2 防除対策

(1) 健苗確保のため塩水選（比重うち1.13以上、もち1.08以上）を行う。なお、より高濃度で実施すると罹病籾の除去率を高めることができる。

また、その際は、種子が不足しないように留意する。

(2) 30℃以上で発病しやすいので、出芽時、育苗期間中の温度管理に注意する。

3 防除上注意すべき事項

(1) 未消毒種子を使用する場合

ア 塩水選を行う。

イ 種子消毒を徹底する（参照 病虫害防除所ホームページ）「農作物病虫害・雑草防除指導」http://www.nrs.pref.yamaguchi.lg.jp/hp_open/a1720160/00000008/hyoushi.htm

ウ 温湯種子消毒は、もみ枯細菌病に対する防除効果が十分でないので、生物農薬を組み合わせた種子消毒を実施する。

(2) 消毒済購入種子を使用する場合

育苗期間中の温度管理等の防除対策を徹底する。

(3) 育苗期間中に苗腐敗症や生育不揃いの苗が認められた場合は、罹病している可能性があるため、速やかに処分し移植しない。

(4) オキシリニック酸剤（スターナ剤）耐性菌の発生が県内全域で確認されているため過去に防除効果が低かった場合は他剤に変更する。

(5) 本田での発生が予想される場合には出穂前に予防的に薬剤（カスガマイシン剤、オリゼメート剤など）散布する。

(6) 農薬使用基準を遵守する。

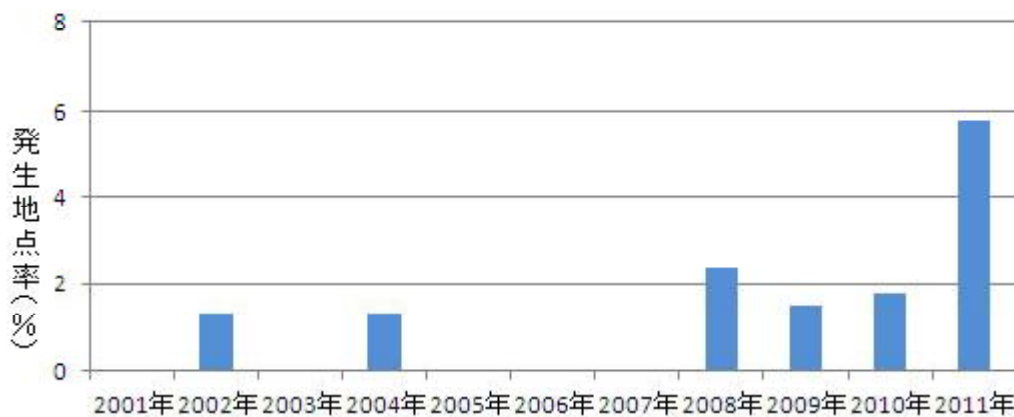


図 イネもみ枯細菌病の発生地点率の推移
注) 発生地点率は8月下旬の値

4 本病の特徴

- ・もみ枯細菌病は、苗腐敗症（写真1、2）と本田での籾枯症（写真3）を起こす細菌病である。
- ・苗腐敗は、育苗箱中で、茎の褐変が坪状に発生する。
- ・健全に見えても生育の進んだ苗の新葉を引っ張ると、容易に葉身が抜けるのが、本病の特徴である。
- ・本田の籾枯症は出穂前7日間の最低気温が22～23℃以上で出穂前後に適度の降雨と風があると多発する条件となる。



写真1 もみ枯細菌病に罹病した育苗箱
外見上、生育が不揃いになる



写真2 苗腐敗症
地際部が褐変腐敗する。

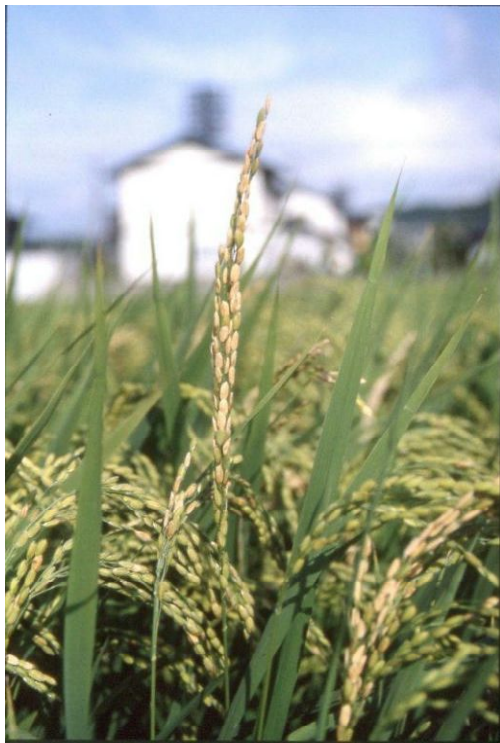


写真3 発病した穂
穂全体が発病すると変色したもみ
と直立した穂が確認される。



写真4 発病した籾
左：健全籾 右：罹病籾



写真5 罹病した玄米
稔実が悪く、玄米の横に健全部と
の境界が帯状に褐変する。